

*Сигнал*

*Всеволод Михайлович Гаршин*

信号

——フセヴオーロド・ガルシン 神西清訳

【やぶちゃん注：これは

*Всеволод Михайлович Гаршин (Vsevolod Mikhailovich Garshin)*

*Сигнал, (Signal)*

一八八七年に発表されたフセヴオーロド・ミハイロヴィチ・ガルシンの短篇「信号」の全訳である。底本は岩波文庫一九五九年刊の「あかい花 他四篇」神西清訳（本書は新字新仮名版）を用いた。ルビの拗音と思われる部分（本書は旧来のルビ・システムで拗音表記がなく同ポイント活字を用いている）は拗音表記にした。本公開の現時点ではネット上には本翻訳の電子テキストは存在しないものと思われる。【二〇一四年十一月六日 藪野直史】

信号

セミヨーン・イヴァーノフは鉄道の線路番を勤めていた。彼の番小屋から一方の駅までは十二露里、もう一つの駅までは十露里あった。四露里ほどの土地に去年大きな紡績工場が立った。その高い煙突がはるか森陰から黒々とのぞいていたが、それより近くには、両隣りの番小屋を別にすると、森番の家ひとつなかった。

セミヨーン・イヴァーノフは病身の、生活に疲れ切った男であった。九年前に彼は戦争に出たことがある。ある将校の従卒を勤めて、遠征の辛苦をつぶさに主人と共にしたのである。飢えに苦しみ、寒さに凍え、炎天にやきこがされ、その炎天や寒空をついて、日に四十露里から五十露里の強行軍をしたものである。銃火の下に身をさらしたこともあったが、幸いとかすり傷ひとつ負わずにすんだ。ある時などは彼の連隊が第一線に立ったこともある。そのときは、まる一週間ぶつ通しにトルコ軍と銃火を交じえた。味方が戦線を敷いている場所と、くぼ地一つをはさんでトルコ軍の戦線があり、朝から日暮れまで、ときどき思い出したように弾丸を送ってよこすのだ。セミヨーンの付いている将校もその戦線にいた。でセミヨーンは日に三度三度、谷間にある連隊庖厨ほうちゆうから、しゅんしゅん沸いたサモヴァルと食事を運んで来てやるのだった。サモヴァルをさげて暴露地帯を歩いて行くと、弾丸がひゅうひゅう鳴ってそこらの石にびしつびしつとぶつかる。セミヨーンはこわくて、思わず涙が出るけれど、それでもからだは進んで行く。隊の将校連はこの彼に大満足だった。彼のおかげで二六時ちゆう熱い茶を欠かしたことがないからである。彼は無事に戦地から戻っては来たが、ただ手足にリユーマチの痛みを覚えるようになった。それからこつち、彼のなめた苦労はひと通りではなかった。家に帰ってみると――年とつた親父おやじはなくなっていた。餓鬼も四つの歳で、のどの病でやはり死んでいた。セミヨーンは女房とたった二人きりになった。暮らし向きもうまく行かなかったし、第一あの浮腫むくみの来た手足で地面を耕すのはもともと無理だった。二人は自分の村に居たたまれないことになって、新しい土地へいいことを捜しに出かけた。セミヨーンは女房を連れて、国境の方へも行ってみたし、ヘルソンにも、ドン地方にもしばらく足をとめてみた。どこへ行ってもいい芽は出なかった。とうとう女房は下女奉公に出て、セミヨーンはあいかわらずそこら流れ回っていた。あるとき汽車で旅をするようになったが、とある駅に停車したとき、その駅長がどうやら見覚えのある人のような気がした。

セミヨーンが駅長をじろじろ見ていると、向こうでもやはりセミヨーンの顔をじつと見ている。

やがてお互いに思い当たった。もといた連隊の将校だったのである。

「お前イヴァーノフじゃないか？」と相手はいった。

「はっ、そうであります、旦那様。私なんですあります。」

「なんだってこんな所へやって来たんだね？」

セミヨーンはこれこれしかじかだと、身の上をうち明けた。

「でこれからどこへ行くこうというのかね？」

「それがわからないのであります。」

「なにをばかな、なぜわからないのか？」

「はてそうであります、旦那様。つまり行くところが無いのであります。何か仕事をみつけなくてはならないのであります。」

駅長はじつと彼を見て、しばらく考えていたが、やがてこう言った。

「なあどうだね、当分この駅にすることにしてみちやあ。お前たしか女房があるはずだな？ 女房はどこに置いてある？」

「はっ、そうであります、女房がありますんで。女房はクールスク市の商人の家に下女奉公に行っております。」

「じゃあ女房に手紙を出して、こつちへ来るように言つてやれ。無賃乗車券をなんとかしてやるう。この線路番の小屋が一つあくことになつてゐるんだ。すぐお前のことを保線課長へ申請してやるとしよう。」

「ほんとにありがとうございます、旦那様」とセミヨーンは答えた。

彼はそのまま駅に足をとめた。駅長の家の勝手仕事を助けたり、薪を割ったり、構内やプラットフォームの掃除をした。二週間すると女房もやつて来たので、セミヨーンは手押しのトロツコに乗つて、自分の番小屋へ行った。番小屋はまだ新しく、暖かで、薪ときたら望み放題あるし、野菜畑も小さいながら前の線路番の残して行ったのがあつたし、半町歩からの耕地も線路の両側にあつた。セミヨーンはうれしくなつてしまつた。どんな具合に世帯をもつて行くか、牝牛や馬の一匹も買おうか、などと考えはじめた。

必要な物品はのこらず支給された。青旗、赤旗、手提灯、呼子、ハンマー、止めねじを締めるスパナ、鉄挺子、シャベル、箒、ねじ釘、犬釘、それからまた鉄道規則のつている薄い本が二冊に、列車時間表も渡された。はじめのうちセミヨーンは夜の目も寝ずに、時間表をすっかり暗記するのだった。列車が通るまでまだ二時間も間があるのに、自分の受持区間をひと巡りしたり、番小足の前のベンチに腰かけて、レールが震動して来はしないか、汽車の音はまだしないかと、たえず眼や耳を働かせていた。規則もすっかりそらで覚えてしまつた。読む方は不得手で、どうにかつづりをたどりたどり読む程度だったが、それでもちやんと暗記してしまつた。

それは夏のことだった。仕事はつらくはなかつたし、雪をかく世話もいらなかつた。それにまたこの線には列車がめつたにはいつてこないの、セミヨーンは一昼夜に二度ずつ

自分の受持区間を見回って、そここの止めねじをあたってみたり、ゆるんでいると見れば締め上げたり、じやりを平らにならしたり、水管の具合を調べたりして、それから畠の面倒をみに戻って来る、ところが畠のことになると、厄介なことが一つあったというのは、何事にまれやろうと思うことはいちいち、線路監督に願い出なければならなかった。その監督から保線課長へ報告を出すというわけで、願いが許可になって戻ってくる内には、時季が過ぎてしまうのだった。セミヨーン夫婦はだんだん退屈にさえなつて来た。

二た月ほどの時がたった。セミヨーンは両隣りの線路番と顔なじみになりだした。一人はよぼよぼのじいさんで、鉄道の方では前々から更迭をもくろんでいた。ほとんど小屋から出たことはなく、細君が代わりに線路の見回りをしていた。もう一人の、駅に近い方の小屋にいる線路番は、まだ若い男で、やせてこそいるけれど筋骨たくましかった。彼とセミヨーンとが初めて顔を合わせたのは、見回りのとき、お互いの小屋の中ほどの線路の上でだった。セミヨーンは帽子をとって、お辞儀をして、

「ごきげんよろしう、お隣りさん」と言った。

隣りの男は横目でじろりと彼を見て、

「こんにちは」と言った。

そしてくると背中を向けると、すたすた向こうへ行ってしまった。そのあとで女房同士も互いに顔を合わせる機会があった。セミヨーンの女房のアーナは、隣りの細君と挨拶あいさつをかわしたが、向こうはやはりあまり口数をきかないで、さっさと行ってしまった。セミヨーンもある時その細君を見かけたので、

「ねえおかみさん、あんたのご亭主はどうしてあんなに無口なんですね？」と試みてみた。

女房はちよつと黙っていたが、やがてこう言った。

「けどね、いったい何をあの人がお前さんとおしゃべりすることがあるの？ だれだつてみんな自分の仕事があるんだもの……お前さんも帰って仕事をしたいいでしょ。」

とはいえ、それから一と月もすると、二人は懇意になった。セミヨーンとヴァシーリイは線路のうえで落ち合うと、土手の縁に腰をおろして、互いにパイプをふかしながら、めいめいの身上話みのうへばなしをするのだった。ヴァシーリイの方はどつちかと言うと聞き役で、セミヨーンが自分の村のことや戦地のことを、話してきかせた。

「こう見えても」と彼は言うのだった、「おれもずいぶんと苦労して来たものさ。それに老い先ももう長くはねえんだ。つまりおれは、仕合わせを授からなかったのさ。いったん

神様がある運勢をその人にお授けなすった以上は、もうそれつきり動かしようもないんだ。まったくよ、なあヴァシーリイ・ステパーヌイチ。」

するとヴァシーリイ・ステパーヌイチは、パイプを線路の端でぼんとはたいて、立ち上がってこう言う。

「うんにや、おめえやおれの一生を台なしにしやがるのは、運勢なんてもんじゃあねえ、人間どもなんだ。まったくこの世の中に、人間ほど強欲で性の悪い獣はねえよ。狼が共食いなんかしねえが、人間ときた日にや生き身の人間をぼりぼり食うんだ。」

「いいや兄弟、狼は共食いをやるぜ、そんなこと言うもんじゃねえよ。」

「ひよいと口に出たんで言ったまでよ。と荒く人間くれえむごい生き物はねえぜ。これで人間が性悪でも強欲でもなかったら、おいらの暮らしも立とうになあ。見ねえ、どいつもこいつもお前の生き身に爪を立てようとねらってるんだ、肉をへぎとってくらいつこうと牙をといでるんだ。」

セミヨーンは考え込んでしまった。

「おれにやわかんねえけどね、兄弟」と彼は言う、「ひよつとしたらそうかもしんねえ。だがもしそうとすりや、それにはそれでちゃんと神様のおぼし召しがあるんだあね。」

「だがもしそうとすりや」と、ヴァシーリイは相手の言葉じりをとって、「おいらがこうして話をすることもいんねえわけだ。胸くその悪いこたあ残らず神様に背負わしまつて、お手前はすわり込んでじつと辛抱してるんなら、そいじゃあもう兄弟、何も人間様なこたあいらねえ、畜生で結構だ。おれの言いてえのはそいだけよ。」

と言いついで、くるりと背中を向けると、あばよとも言わずに行ってしまった。セミヨーンも立ち上がった。

「おおい隣りの人」と大声で、「なんだってそう悪態をつくんだい？」

隣りの男はふり向きもせず、ずんずん行ってしまった。セミヨーンはそのまま、ヴァシーリイの姿が切り通しの曲がり角に見えなくなるまで、長いことじつと見送っていた。家へ帰って来ると、女房にこう言った。

「なあ、アリーナ、おいらの隣りのやつあ、ありや悪玉だぜ、人間じゃねえ。」

とはいえ二人は仲たがいをしたのではなかった。そのうちまた顔を合わせると、あいかわらず話をしでしたが、話の題目は同じことだった。

「ええ兄弟、もし人間どもがこうも……なんでなかったら、お互えに番小屋なんぞにくすぶらねえでもすんだんだぜ」とヴァシーリイは言った。

「番小屋がどうだと言うんだね……結構、暮らして行けるじゃねえか。」

「暮らして行ける、ふん暮らして行けるか……。だめだなあ、お前は！ いろんな世渡りをして来たくせに、さっぱり世間というものがわかっちゃいねえ。いろんなことを見て来たくせに、さっぱり正体が見えちゃいねえ。貧乏人というのは、ここらの番小屋にしようがいまいが、どっちみち人間らしい暮らしはできねえんだ！ そこいらの人食い鬼どもに、お前は食われてるんだぜ。生血のありったけをしぼっちまっつて、お前が老いぼれになつてくると——まるで油かすか何かみたいに、ぽいと豚の餌にくれちまうんだ。お前、給料はいくらもらつてるね？」

「うん、大したこともないさ、ヴァシーリイ・ステパーノヴィチ。十二ループリだよ。」

「おらあ十三ループリと半分だ。そこでお伺い申すが、こりやいったいどうしたわけだね？ お上の規則じゃだれかれ問わず一律に、月十五ループリの手当に、薪や油がつくことになつてるんだ。いったいだれが、お前が十二ループリでおれが十三ループリだと、そんな決め方をしやがったんだ？ ええ、伺いてえもんだね？…だのにお前は、暮らして行けるとおっしゃるんだ！ 断わっておくけど、高が一ループリ半だの三ループリだののことを、かれこれいうんじゃないんだぜ。十五ループリまるまるくれたにしたつて同じことなんだ。おれは先月、停車場に行つたつがね、そこへ局長が汽車で通りかかったのを、おれはこの目で見たんだ。まあ押んだというわけかな。やつこさん別仕立ての客車くるまに納まつたが、やおらプラットフォームに降り立って、そっくり返つていやがった。下っ腹によ、金鎖かなんかちやらつかせやがってよ、ほっぺたなんざ、まるではちきれそうに、いい色してやんのさ。……おれたちの血をたんと召し上つたつてわけさ。……えい、くそ、力とご威光がありさえすりや！……まあさ、おれがここにいるのも長いことじゃねえぜ。出て行くんだ、足の向く方へな。」

「出て行くつてどこへ行くんだね、ステパーヌイチ？ あんまり上を見るとろくなことあないぜ。ここにいりやお前、家もあるし、暖かだしさ、小さいながら畠地もあるんだ。それにおかみさんは働きもんだしさ……。」

「畠地だと！ まあおらんとこの畠を見てから言つてくれ。枯れ枝一本立つちやいねえんだ。この春キャベツを植えたんだがね、するてえとたちまち監督のやつが飛んで来て、『こりや何ちゆうことだ？』とこうなんだ、『なぜ願い出んのか？ なぜ許可を受けんか？ 根こそぎそっくり掘つ返しちまえ。』やつこさん酔っぱらつてたんだ。これが素面しらふのときだつたら、見て見ぬふりですましたに違いねえのに、その時は妙にえこじになりやがってね…

…『三ループリの罰金だ! …』と来た。」

ヴァシーリイは口をつぐむと、パイプを二た吸い三吸いしたが、やがて小声で、

「すんでのことで、あいつ死ぬほどぶちのめしてくれるところだったよ。」

「なあ、隣りの人、なんぼなんでもお前さんは気が早すぎるよ。」

「気が早いんでもなんでもねえさ、ただ筋の通ったことを言ったり考えたりするまでよ。

まあそのうちにきつと返報はして見せるぞ、ゆでだこめ。保線課長へ直訴してやるんだ。

今に見るよ!」

そして実際、彼は直訴をしたのである。

あるとき保線課長が線路の検分にやって来た。もう三日すると、ペテルブルグのお偉い方々がその線を通過するはずだった。それが検閲という触れ込みなので、その一行の通過に先だって、万事きちんと整頓せいとんしておく必要があったのだ。砂利バラスを敷き足し、きれいにならし、まくら木をいちいち検査し、犬釘を打ち直し、止めねじを締めなおし、杵くいは塗りかえ、踏切りには黄色い砂をまき足すようにとのお達しが出た。隣りのおかみさんまでが、例のじいさんを草取りに追っ立てる騒ぎだった。セミヨーンはまる一週間せつせと働いた。線路の方がすっかり片づくくと、自分の長上衣カフタンのほころびも繕い、きれいにブラシをかけて、真鍮しんちゆうの徽章めいしょうは煉瓦れんがでもって、ぴかぴかになるまで磨き上げた。ヴァシーリイも働いた。課長がトロツコでやって来た。工夫が四人がかりでハンドルを回して、歯車がぶんぶんうなっていた。そのトロツコで一時間に二十露里もぶつ飛ばすので、ただもう車輪がごうごう鳴っていた。セミヨーンの小屋の前へすっ飛んで来た。セミヨーンはそこへとんで出て、軍隊式に報告をした。

万事遺漏のないことがわかった。

「お前は以前からここにおるのか?」と保線課長はきいた。

「五月の二日からあります、閣下。」

「よろしい。ご苦労じゃった。して百六十四番の小屋はだれかな?」

線路監督は同じトロツコで随行していたが、それに答えて、

「ヴァシーリイ・スピリドノフでございます。」

「スピリドノフと、スピリドノフと……。ははあ、去年君が注意人物じゃと言うて

おった、あの男だな?」

「さようでございます。」

「ふむ、よしよし。そのヴァシーリイ・スピリドノフの方を見よう。出せ。」

工夫たちはハンドルにしがみついた。トロッコは先へ進んで行った。

セミヨーンはその後ろを見送りながら、こう考えた、『こいつああの連中、隣りのやつとひと悶着おこすぞ。』

それから二時間ほどすると、彼は見回りに出て行った。すると向こうの切り通しのところから、線路づたいにやって来る人影が見えた。頭の辺に何やら白いものがちらちらしているセミヨーンが目を凝らしてみると、それはヴァシーリイだった。杖を片手に、小さな包みを肩にかけて、片頬には布ぎれを巻きつけている。

「隣りの人、どこへ行こうってんだね？」とセミヨーンは呼びかけた。

ヴァシーリイはすぐ鼻先へやって来た。まるで顔色はなく、白墨のように白かった。目は獣のようにぎらついていて、口をききだすと——声はとぎれがちだった。

「都へ行くんだ」と彼は言った。「モスクヴァへ行くんだ……本省へな。」

「本省へ……。うん読めた！　じゃあ訴えに行くんだね？　よしなよ、ヴァシーリイ・ステパーヌイチ、忘れちまえよ……。」

「うんにや、兄弟、忘れるわけにや行かねえ。忘れるにやちと手おくれなんだ。見ねえ、あいつおれのつらを張りやがったんだ、こうして血まで出しやがったんだ。生きてる限りは、忘れるわけにや行かねえ、このままますますわけにや行かねえんだ！　吸血鬼め、思い知らせてやらにやおさまらねえ！……。」

そういう彼の手をセミヨーンは取った。

「やめにしろよ、ステパーヌイチ。おらあ悪いこたあ言わねえ、そつとしとくが身のためだぜ。」

「何が身のためだ！　そつとしとくが身のためだぐれえ、おれだつて育も承知だあ。お前は運勢のことを言つてたつげが、今になってみりやなるほどと思ひ当たらあ。みすみす身のためにやならねえと知りながら、正義のためにや、兄弟、やっぱり一歩もひけねえものなあ。」

「だがまあ聞こうじやないか、いったいどうしてそんなことになったんだね？」

「うむどうして……。あいつめ何から何まで検査しやがったんだ、わざわざトロッコを降りて、小屋の中までのぞきやがったんだ。てつきり小やかましいことを抜かすだろうとは、こつちも覚悟の前だった。だから万事手抜かりなく整頓しといたのよ。そこでまあ無事にトロッコへお戻りになるうとした矢先に、おれが例の直訴をもち出したというわけさ。いややつこさん、聞くが早いかか鳴り立てたぜ。『いやしくも』って抜かすんだ、『政府



の検閲があるというのじゃぞ、それをなんとというやつだ、野菜畠の不服なんぞを持ちだすとは！』と、こうなんだ、『二等官の方がたがお見えになるというんじゃぞ、それをお前はキャベツのことなんぞをつべこべ言いおる！』おれは腹を据え兼ねて、ついいやがらせを言っちゃまった。なあに別に大したことじゃないんだがね、それが妙にやつこさんの気にさわったんだな。いきなりぶうんと拳固げんこが飛んで来た。おれたちの我慢なんぞ、くそいまいましい！ これでもこらえろつてのか……おれはじつと歯を食いしばっていた、そうされるのが理の当然だといったふうにな。やつらが行っちゃまうと、おれははっと気がついて、顔の血をふくと、こうして出かけて来たのよ。」

「で、小屋の方はどうするつもりだい？」

「かかあが残ってらあな。あれが抜け目なくやってくれらあ。それにやつらがどうなるうと、やつらの線路がどうなるうと、おれの知ったことじゃねえしな！」

ヴァシーリイは立ち上がって、身支度をした。

「あばよ、イヴァーヌイチ。訴えが聞き届けてもらえるかどうか、わかんねえけどなあ。」

「お前さん徒歩てくで行くつもりかい？」

「停車場で貨車に乗っけてもらうつもりだ。あすはもうモスクヴァさ。」

隣り同士は別れを告げた。ヴァシーリイはそのまま出かけて行って、なかなか戻ってはこなかった。女房は彼の代わりに、昼はもとより夜の日も寝ずに働いた。亭主の帰りを待ちわびて、げっそりやつれてしまった。三日目になると検閲の一行がやって来た。機関車に手荷物車が一輛りょう、それに一等車が二輛ついていた。だがヴァシーリイの姿はあいかわらず見えなかった。四日目にセミヨンは、彼の女房を見かけた。顔を泣きはらして、まっ赤な目をしていた。

「ご亭主は戻りなすったかね？」ときいてみた。

女房は片手を振って見せると、ひと言も口をきかずに、自分の小屋の方へ行っちゃった。

セミヨンはその昔、まだがんぜない子供のころに、猿柳さるやなぎの枝で笛を作ることを習い覚えていた。柳の枝の芯しんを焼きぬいて、要所要所に錐きりで穴をあけ、一方の端に歌口をこしらえると、見事に音色をととのえて、なんなりとお望みの曲が吹けるように仕上げるのだった。彼は役目の暇々にそうした笛をたくさんつくって、懇意な貨物列車の車掌にたのんで、町の市場へ出してもらっていた。一本あたりニコペイカのお銭おちになった。あの検閲があつ

て三日目に、彼は夕方六時の汽車の見張りに女房を小屋にのこして、自分は小刀をもって、柳の枝を仕入れに森へ出かけた。受持区域のはずれまで来ると——そこで線路は急カーヴをしていた——彼は土手を降りて、森の木の間をだらだらとおりて行った。半露里ほど先に大きな沼があつて、そのほとりに例の笛の材料にはおあつらえむきの見事な猿柳のやぶがあつた。彼は一かかえほども枝を切ると、そのまま家路についた。森の中をわけて行く。

日はもう西に傾いて、あたりはひっそりと死んだような静けさ。聞こえるのはただ、チチと呼びかわす鳥の声と、足もとに踏みしだいてゆく枯れ枝の響きだけだつた。それから少し行つて、間もなく線路の土手に出るといふあたりで、何かほかの物音が聞こえるような気がした。どこかそこらで、鉄と鉄とがかすかに打ち合うような音だつた。セミヨーンは足を早めた。その日ごろ彼らの受持区間に修理は行われていなかった。『あの音は何だろう？』と心に思った。やがて森のはずれへ出ると、目の前は見上げるような鉄道の土手だつた。その土手の上に一人の男がしゃがみ込んで、しきりに何かやっていた。セミヨーンはそつとその男の方へ登つて行つた。どこかのやつが止めねじを盗みに来たんだなと思つたのだ。じつと見てみると、やがて男は立ち上がった。手には鉄挺子かなてこを握っていた。つまり鉄挺子でもつてレールの床をゆるめて、はずれるようにしたわけだ。セミヨーンは目のなかが暗くなつてしまつた。わめこうとしたが、声が出なかつた。それがヴァシーリイだと見てとると、彼はいっさんにかかへががつたが、相手は鉄挺子とねじ回しをかかえたまま、土手の向こう側からまりのようにくろげ降りてしまつた。

「ヴァシーリイ・ステパーヌイチ！　お願いだ、いい子だから戻つて来てくれよう！　鉄挺子を借してくれよう！　レールを直すんだ、だれにも知れやしないんだ。戻つて来てくれ、畜生道へ落ちないでくれよう。」

ヴァシーリイはふり向きもせず、森の中へ逃げ込んでしまつた。

セミヨーンははずされたレールのそばにつつ立っていた。かかえていた枝束をどさりと落とした。今度の列車は貨物ではなくて客車なのだ。停車させようにも手立てがなかつた。旗がないのである。レールを元通りに直そうにも、素手では大釘も打てはしない。こうなつたら駆けだすほかはない、何か道具をとりて小屋へ駆けつけるほかはない。神様、お助けください！

セミヨーンは自分の小屋をさして走つた。息ぎれがする。それでも走つた——へたへたと今にも前へつんのめりそうになる。やつと森を駆け抜けて、ありがたや小屋まではもう二町そこそこだと思つた途端に、ふと耳に工場の汽笛ほおの鳴るのが聞こえた。六時だ。六時

二分には列車が来る。ああ神様！ 罪なき人々の命をお救い下さい！ 祈るひまにもセミヨーンの目にまざまざと浮かぶのは、機関車が左の車輪をレールの切れ目に引っかけて、ぐんと一と揺れ、たちまち横へかしいで、まくら木を蹴けやぶり、木っぱみじんにはね散らす光景だ。おまけにあすこはカーブだ、曲がり角かどなのだ、それに高い土手と来ている。列車はあわやという間もなく、十二三間もの谷底へ逆落とした。その三等車には、ぎっしりとすしづめの客、なかにはいたいな子供もいよう……。それがみんな今、一寸先の危難も知らずにすわっているのだ。神様、どうすればいいのかお教え下さい！……ああもう遅い、小屋へ駆けつけてそれから現場へ戻ったんじゃ、とても間に合わない……。

セミヨーンは小屋まで駆けつけぬうちに、くるりと後ろ向きになると、前よりいっそうの速力で駆けだした。ほとんど無我夢中で、この先どうなることやら自分でも知らずに、ひた走りに走った。はずされたレールのところへ駆け戻って見ると、例の枝がうず高く散乱していた。彼は身をかがめて、その一本を引っつかむと、何のつもりかは自分も知らずに、そのまま先へ駆けだした。もう列車の近づく気配がしていた。はるかに汽笛の音が聞こえ、レールがかすかに規則正しい震動を伝えはじめていた。もうそれ以上は走る力がなかった。彼は恐ろしい場所から百間あまりの所で立ちどまった。その時ふと、一条の光明がさつと頭にひらめいたのである。彼は帽子をぬぐと、その中からもめんのハンカチを取り出した。それから長靴ながぐつの胴へ手を入れて、小刀を取り出した。そして十字を切った、――『主よ、恵みたまえ！』と。

その小刀を彼はやにわに、自分の左の二の腕へつつ刺した。血はさつと吹きでて、熱い流れをなしてほとばしった。彼はその血潮にハンカチを浸して、しわをのばしてひろげると、枝の先に結わえつけて、わが血に染めた赤旗をかかげた。

彼はつつ立ったまま、その旗をしきりに打ち振る。汽車はもう見えていた。旗は機関手の目にはいらぬと見え、ぐんぐん汽車は近づいて来る。ここまで来たらもう最後だ――百間あまりの距離では、あの重たい列車が止められるものか！

血はあとからあとから吹きでてくる。セミヨーンは傷ぐちを小わきへ押しつけて、口をふさごうと思うのだが、血はいつかな止まらない。どうやら腕を深く切ったと見える。そのうちにめまいがして来た。目のなかに黒い斑くまの影がちらちらし出したかと思うと、やがて真のやみになってしまった。耳の中ではがんがんとしきりに鐘が鳴る。彼にはもう汽車の姿も見えず、そのとどろきも聞こえない。頭に渦まく考えはただ一つ――『もう立ってはおられぬ、おれは倒れる、ああ旗が落ちる。あの汽車はおれのところを走り抜けるんだ

……お助け下さい、主よ、だれか代わりを早く……。』

と思ううちに目のなかは暗くなりだし、心はうつろになって、彼は旗をとり落とした。しかし血染めの旗は地面へ落ちはしなかった。何者かの手がむんずとそれをひつつかむと、轟々と近づいてくる列車に向かって高く振り上げたのだった。機関手はそれを認めて、調整器の弁をとじると、蒸気を切りかえた。列車は止まった。

車室からどやどやと飛びだして来た人々が、たちまちまわりに黒山をきずいた。見ると、全身あけに染まった男が、気を失って倒れていた。もう一人の男はそのそばに、血だらけのぼろ布のついた棒を握ってたたずんでいた。

ヴァシーリイはぐるりと一同を見回すと、そのまま首をおとして、

「あつしを縛っておくんさい」と言った、「あつしがレールをはずしたんだ。」